Edited by Christian K. Wedemeyer and Wendy Doniger, *Hermeneutics, Politics, and the History of Religions*

Oxford University Press, March 2010, xxxvi+303pp, $35.00

藤井　修平

本書は，2006 年にシカゴ大学神学部で開かれた学会，「Hermeneutics in History: Mircea Eliade, Joachim Wach, and the Science of Religions」での発表を基にした論文集である。研究の対象となっているミルチャ・エリアーデとヨアヒム・ワッハは，共にシカゴ大学神学部宗教史学科でかつて教鞭を執っており，その遺産の再評価という目的がこの学会にはある。本書によって，エリアーデとワッハから直接ないし間接的に最も強い影響を受けたであろう研究者の目から見た，二人の今日における評価を窺い知ることができる。

本論ではまず収録されている全ての論文を概観し，エリアーデとワッハ研究の現状を明らかにする。その後，エリアーデとワッハの研究を批判的に受け継ぐ方法を探るために，現在の宗教学の課題である「宗教」概念の批判という主題をワッハの理論の検討を通して論じているアレスの論文を取り上げて分析を試みる。

以下が本書の章立てである。

Contributors

Introduction Ⅰ: Two Scholars, a "School", and a Conference, Christian K. Wedemeyer

Introduction Ⅱ: Life and Art, or Politics and Religion, in the Writings of Mircea Eliade, Wendy Doniger

Part I Joachim Wach; Contexts, Categories, and Controversy

1. Joachim Wach between the George Circle and Weber's Typology of Religious Communities, Hans G. Kippenberg
2. The Master-Interpreter: Notes on the German Career of Joachim Wach（1922-1935）, Steven M. Wasserstrom
3. After Naming Explosion: Joachim Wach's Unfinished Project, Gregory D. Alles
4. Wach, Radhakrishnan, and Relativism, Charles S. Preston

Part Ⅱ Mircea Eliade: Literature and Politics

5. Eliade and Ionesco in the Post-World War Ⅱ Years: Questions of Identity in Exile, Matei Calinescu
6. The Political and Rhetorical Structure of the Eliadean Text: A Contribution to Critical Theory and

Discourses on Religions, Daniel Dubuisson
7. Modern Western Esoteric Currents in the Work of Mircea Eliade: The Extent and Limits of Their Presence, Antoine Faivre
8. The Camouflaged Sacred in Mircea Eliade's Self-Perception, Literature, and Scholarship, Moshe Idel
9. The Influence of Eastern Orthodox Christian Theology on Mircea Eliade's Understanding of Religion, Bryan Rennie
10. The Eternal Deferral, Jonathan Z. Smith
Part III Mircea Eliade: Politics and Literature
11. Southeast Europe and the Idea of the History of Religions in Mircea Eliade, Florin Turcanu
12. Fascist Scholars, Fascist Scholarship: The Quest for Ur-Fascism and the Study of Religion, Elaine Fisher
13. Tracing the Red Thread: Anti-Communist Themes in the Work of Mircea Eliade, Anne T. Mocko
14. Mircea Eliade's Ambivalent Legacy, Calro Ginzburg
Index

本書の冒頭には編者であるウェデマイヤーとドニガーの序文が置かれ，個々の論文の解説がなされているほか，エリアーデ研究，ワッハ研究の現状が述べられている。とりわけ注目に値するのが，ウェデマイヤーがエリアーデとワッハの両者は当時支配的だった現象学的あるいは解釈学的アプローチに非常に重きを置いたと述べつつ，「近年では，公平に言えば，この風潮は死に瀕している。王は死んだのだ」（p. xxv）と主張している点である。この言葉は現状を捉えている。以前のエリアーデを扱った論文集では彼の現象学や解釈学の実態に迫ろうとする研究はいくらか存在していたが，本書ではエリアーデについてもワッハについても，そのような試みはほとんどなされていない。元になった学会と比較すると標題に「politics」という言葉が付与されていることもそれを示唆しているといえるだろう。本書の研究者の関心の多くは，理論よりも社会的関係性に向いているのである。

その傾向を踏まえつつ，各論を概観していこう。本書は全三部構成であり，第一部にはワッハについての論考が収められている。キッペンベルクの論文では，ワッハのドイツ時代の思想形成の源流として挙げられるシュテファン・ゲオルゲとマックス・ヴェーバーの二人とワッハとの関係が考察されている。ここではワッハはゲオルゲ一派から教授方法のモデルを，ヴェーバーの社会学的方法論からは宗教研究の一手段を取り入れたと結論付けられている。

ヴァッサーシュトロムの論文においても同様にドイツ時代のワッハに与えた思想の影響関係を調査し，それを学問の方法論を弟子に伝える者としての「親方（master, Meister）」というゲオルゲ一派から取り入れられた概念と，ワッハ独自の，宗教現象に最もふさわしい意味を与えるものとしての「解釈者（interpreter）」という概念の二つで特徴付けている。ワッハはこれらの概念の統合を図ったとヴァッサーシュトロムは述べている。

次にアレスの論文では，類型論による概念の限りない増加を「名付けの爆発（naming explosion）」と呼び，その影響下にあるワッハの理論の問題点を今日の宗教学全体の課題と絡めて論じている。

アレスの論文の詳細については後述する。

プレストンの論文「ワッハ，ラーダークリシュナン，そして相対主義」では，ラーダークリシュナンの唱える相対主義に対するワッハが行った反発と，その背景にある彼のキリスト教信仰，ヨーロッパ中心主義を明らかにしている。ワッハは宗教の普遍的心理はあらゆる相対的立場を超えたところに潜在するというラーダークリシュナンの規範的相対主義を避け，全ての価値の等しさを要求しない叙述的な相対主義を代わりに採用し，それを「相対的相対主義（relative relativism）」（p.81）と呼んだ。

第二部と第三部はエリアーデに関する論文が収録されている。カリネスクの論文ではエリアーデと，彼と同様に戦争を期にルーマニアを去ったシオランとイヨネスコのルーマニアに対する意識の違いが比較されている。フランス文学者としてのアイデンティティを確立したシオラン，イヨネスコとは対照的に，エリアーデだけはフランスにおいてもアメリカにおいても，小説の中に隠された形でルーマニアのアイデンティティを保持し続けたことが資料の細かな分析によって述べられている。このことは，彼のアメリカ時代の小説がルーマニア語で，アメリカに移住したルーマニア人に向けて書かれていたことからも裏付けられる。

デュビュイソンの論文においては，エリアーデの語りそのものを対象に，彼の問題点が指摘されている。エリアーデの著作の修辞的な要素の強さを根拠として，デュビュイソンは「我々はエリアーデが，その一般化の才能によって，彼の読者の『スピリチュアルな』先入観を忘れることなく，学術文化とオリエント，未開人，先史時代とを結びつけるに至るまで大胆であったことを認識しなければならない。エリアーデは一般的な意味で学術的ではなく，むしろ随筆家であり，学術的大衆と同様に一般大衆をも喜ばすことを気にかける嘘発見器であることは真実である」（p.145）と述べ，彼の大衆作家としての立場を強調している。

フェーヴルの論文では，ゲノンやエヴォラ，クマーラスワミーらのトラディショナリストやその他の思想家に対するエリアーデの関心が浮き彫りにされている。この関心がいかにエリアーデ自身に影響を及ぼしたのかについてフェーヴルは結論を避けているが，エリアーデの宗教研究の対象に同時代の思想ないし思想家も多分に含まれていたことは特筆すべきだろう。

イーデルの論文はエリアーデ宗教学の成立の要因を体系的に調査した研究である。彼はまずエリアーデ研究の領域を academica，literaria，personalia に分類し，とりわけ個人的要因である personalia の視点からのアプローチを行っている。イーデルによるとエリアーデに与えた影響は大きく五つに分けられる。そのうち大きな要因はルーマニア，インド，ゲノン・エヴォラらの第二ルネサンスを含むイタリアルネサンスであり，比較的小さな要因としてはルーマニア時代に関わっていた愛国的政治団体である鉄衛団とエラノス会議が挙げられている。後者の二つはエリアーデに対する明白な影響関係は読み取れず，それゆえに弱い要因だと考えられている。その上でそれら全てを貫くモチーフとして，現代においても聖なるものは失われず，隠れた形で存在し続けているという彼の聖の偽装の理論を公的のみならず私的な領域においてもエリアーデは強く意識していたと述べられている。

レニーの論文はアンスガー・パウスが 1989 年に発表した，エリアーデはビザンツ神学に由来する個人的な神学によって理論を構築していたと述べる論文への反論であり，東方正教会とエリアーデの類似点を挙げつつも，その影響が限定的であることを明らかにしている。さらにレニー

はマッカチョンらの「客観的宗教史研究は虚しく，宗教の比較と総合研究は見捨てるか大いに考え直すべき」（p.208）とする宗教学への懐疑論に対してもイェッペ・イェンセンの見解を根拠として反論を行っている。イェンセンによると，エリアーデの宗教現象学は宗教現象の主観的な「理解」を提示し，その主張の解釈学的妥当性によってそれは説得力を持った言説となるのである。

スミスの論文では，エリアーデの『宗教学概論』と『世界宗教史』の比較を行い，そこに見られる方法論の相違を明らかにするとともに，『宗教学概論』と「対になる一冊（companion volume）」として予告されていたものとして『世界宗教史』を理解することができると結論付けている。それは，『世界宗教史』が世界中の宗教現象を記載した辞典としての機能を持ち，『宗教学概論』で述べられる内容の裏付けとなっているからである。そして彼は『宗教学概論』で見られた形態学的アプローチは『世界宗教史』には欠けており，多くが歴史的な変形へと再解釈されていると述べているほか，神話学の観点からエリアーデのいくつかの誤りも指摘している。例えばバビロニアのエルは，どの時代でも神々のヒエラルキーの頂点におり，エリアーデが指摘しているような，忘れ去られた「ひまな神」ではなかったとスミスは述べている。

ツルカヌの論文では，エリアーデ理論と彼がルーマニア出身であることとの影響関係が詳細に検討されている。ツルカヌによると，エリアーデのインド滞在は彼のルーマニア人としてのアイデンティティを考え直す機会であった。そしてエリアーデはオリエントとルーマニアの比較を行い，東南ヨーロッパの特殊性をますます意識することとなった。さらにエリアーデの思想とルーマニアの歴史的立ち位置との類似点は多く，とりわけ反歴史主義はルーマニア人ゆえの視点であるとツルカヌは述べている。

フィッシャーの論文では，エリアーデのあらゆる研究をファシスト的と見る一連の「エリアーデ・スキャンダル」の構造的欠陥を指摘している。それは「ヒトラーへの還元（reductio ad Hitlerum）」という言葉で表現される関係の誤謬であり，一連のエリアーデに対する糾弾は確証の段階を踏んでいないと述べられている。さらにフィッシャーはエリアーデに限らずあらゆる文章からイデオロギー性を読み込む方法論を明らかにしており，「エリアーデ・スキャンダル」の相対化を行っている。

モッコーの論文では，エリアーデがナチズムと共産主義を現代における宗教として述べている資料から，彼がナチズムと共産主義を同一視し，その両方に反感を持っていたと結論付けている。これまでのエリアーデの政治性に関する研究では彼は共産主義を危険視し，一方でナチズムは宗教に対して弾圧的ではないゆえにさほど危惧すべき思想ではないと見ていたとされているが，モッコーの見解ではエリアーデは双方に批判的であったとする点で斬新である。

この論文集の最後となるギンズブルグの論文では，エリアーデ理論の原型となったと推定される，彼と類似した考えを持った思想家とエリアーデの関係が辿られている。ギンズブルグによるとトーマス・マンと神話学者のケレーニイ，人類学者のデ・マルティーノがそれに該当し，特にケレーニイはエリアーデとの親交も深かったと述べられている。これはエリアーデ研究にとって彼の思想の形成に関する新たな影響関係を示唆している点で興味深い発見のように思われる。

以上の概観からわかることとして，本書の対象であるエリアーデとワッハの理論を積極的に取り入れるか，あるいは批判すべきものして研究するのではなく，それぞれの理論の形成過程を彼らの経歴から追った研究が多いということがある。それはエリアーデとワッハの学術的な著作の

内容の検討や，そこからの引用が少ないことからも示される。一方で彼らの書簡や日記など，個人的な文章は頻繁に言及されている。イーデルはこれまでのエリアーデの研究者について，「彼らはエリアーデの著作の二つの分野，すなわち literaria か academica のうち一つのみを扱い，personalia の重要性にほとんど注意を払っていない」（p.163）と述べ，personalia の研究の意義を指摘していることもこの傾向を端的に表している。このことは両者の学術研究以外の資料が近年新たに編纂され，出版されているという状況に由来するものと思われる。とりわけエリアーデに関しては，ポルトガル時代の日記や，本人による改訂が加えられていない後年の日記が出版されていることがドニガーの序文によって述べられている。

そのため，本書では両者の伝記的側面を明らかにすることに大いに貢献しており，そこには多くの新たな発見が含まれている。例えばワッハとゲオルゲ一派の思想，エリアーデとビザンツ正教の思想との比較や，ヴェーバーやケレーニイらの著作との比較が行われていることはエリアーデとワッハの理論の根源を探る研究に新たな視点を持ち込むことに成功している。

しかし，両者の学術著作の外的要因に焦点を当てることによって明らかになることがある一方で，そのことでエリアーデとワッハへの忘却が進行している面もあるように思われる。本書では，冒頭で示したウェデマイヤーの解釈学，現象学に対する見解を始めとして，モッコーは「エリアーデの正体は暴かれ，流行の外にいることを当然と思う」（p.285）と述べ，これ以後はエリアーデを引用しないとまで宣言しているなど，エリアーデとワッハがすでに時代遅れであり，伝記的研究のみにしか値しないというような扱いを受けていることが読み取れる。さらにエリアーデに関しては，デュビュイソンは上述のようにエリアーデの著作には学術的価値がないと述べ，ギンズブルグは「彼の著作は我々の生活する幅広く魔術化，再魔術化された世界を理解するのに役に立たない」（p.323）と述べているなど，エリアーデは無用であるという主張もいくらか見られる。このように，本書にはエリアーデとワッハをすでに過ぎ去った時代に属していると見ている，あるいは見ようと意識しているがゆえの難点，つまり彼らの方法論が流行していないと考えることによって生じるエリアーデとワッハへの等閑視や，研究よりも先行して彼らの位置付けがなされているという事態が見られる。だが，エリアーデに対してなされるこのような位置付けは彼の特定の汚点を拡大視しているがゆえに，性急なものである。デュビュイソンの述べるエリアーデの文章の修辞的な要素はあくまで文の構造に関するものであって，そこからその内容までが否定されるには至らない。モッコーとギンズブルグは自身の研究内容と関連せずにこのような位置付けを行っているが，そこには十分な根拠が挙げられていない。さらに，三者ともエリアーデの学術的研究以外の問題点を指摘して彼に学術的価値がないと結論付けている点で，論理に飛躍があるように思われる。ある研究者の著作に関して何らかの評価を下す場合には，その業績全体から判断すべきであって，一部のみを取り上げて全面的に肯定または否定すべきではないであろう。

このように本書では，エリアーデとワッハの今日における宗教学的意義は薄いと考えている研究者もいる一方，彼らの理論を積極的に批判し，新たな理論を打ち立てることを意図している研究も存在する。アレスの論文では，ワッハの類型論の問題から今日の宗教学の課題を提示している。とりわけ二十一世紀に入ってから，宗教学における「宗教」概念の自明性が疑われるようになっている。その理由としてはまず「宗教」の用語が研究対象から借用したものであり，独自のメタ言語を持っておらず，さらに「宗教」を定義する際に何らかの本質を規定し，それを有する

ものを「宗教」として扱う実体的定義の西洋中心性が疑問に付されていることなどが挙げられる。そのような批判の中心にいるのがエリアーデとワッハであり，彼らが宗教現象学の立場から確立し，自らの宗教学理論の基礎として置いている，宗教現象は他の何物にも還元できないとする「非還元主義」の態度には特に熱心な批判がなされてきた。この論争を引き継いだ内容にアレスの論文では取り組んでおり，そこには多くの示唆が含まれているので，以下に詳しく論じることにする。

アレスはまず要素をカードに書き並べ，最適な配置に至るまで配列するというワッハの特殊な分類方法を紹介し，その問題点を二つ指摘している。第一はその類型によって得るものが少ないということで，これは「名付けの爆発」と関連して，ただ分類し命名することに終始してしまうと述べられている。第二の問題は，ワッハが客観性を重視するにもかかわらず，宗教の「核」や「本質」を措定する点であり，これでは恣意的な要素は免れ得ないとアレスは述べている。

この批判からアレスは新たな宗教学における手法を提案している。その要点となるのが「推量に富んだ（inference-rich）」という概念である。これは，対象に特定の用語を属性付けることにより，多くの想像がそこから行えることを意味している。彼は「推量に富んだ」概念として「人間」を挙げる。対象が人間と呼ばれることにより，それが心臓を持っている，言語を話すといった特徴を推測することができる。一方「宗教」という概念は対象が「宗教的」であったとしても，それゆえ神を信じている，教団に所属しているという推論をすることができない。従って「宗教」という概念は「推量に乏しい」ものであり，「『宗教』という単語は，実質上無意味である」（p.67）と述べている。

このような尺度から「宗教」概念の内包する問題を明示したアレスは，次にそのような概念がこれまで用いられてきたという理由からそこに何らかの意義があったことを認め，それは自然科学的記述とは異なる水準での新たな知識を生み出す作用であり，これこそが標題にもあるワッハの未完の試みから得られるものであるという結論を導いている。このことから，アレスは宗教学の扱う対象が「実体」つまり人間の思考とは独立して存在していると考えられるものに限られていないために自然科学とは異なり，それゆえ確実性を求めて自然科学と同様の手法を用いることはできず，ワッハが目指した一般的な意味での「科学（science）」としての宗教学の統合も不可能であると述べている。代わりに現在宗教学が行うべきこととして彼が提案するのは，独自の手法の確立と，「宗教」に代わるメタ言語の考案である。

以上がアレスの論文の要旨である。彼はワッハの「宗教」の扱いを問題にしながら，その再検討の方法を提案している。このような彼の主張には新たな視点が含まれているように思われる。それは，「宗教」概念の問題をこれまでの「非還元主義」「還元主義」や「規範的」「描写的」といった二分法や，実体的あるいは機能的定義の面での「宗教」の欠陥を指摘するといった手法に頼らずに行っている点である。さらに，「推量に富んだ」という尺度を用いて，結果として宗教学と自然科学の明確な差異を浮き彫りにしている点も興味深い。

アレスの議論を引き継ぐならば，「推量に富んだ」という尺度では測り切れない人間の精神的な活動をいかにして適切に描写できるかということに対するより確かな方法付けが必要となる。そしてそのためには，エリアーデとワッハの著作は大きな役割を果たすことだろう。というのも，ワッハの試みにはその端緒が含まれていることがアレスによって示されているし，エリアーデは

リクールの哲学的解釈学の影響を受けた「総合的解釈学」を宗教学の手法として提唱しているからである。解釈学は，自然科学の「説明」とは異なった精神科学における「理解」の方法を確立することを目的としており，まさにこの問題を解決する糸口であるといえる。

アレスの論文は，このように本書の研究対象であるワッハと，現代の宗教学を結び付けている点で意義のあるものである。以上の内容を踏まえて述べられることは，本書は新たな資料によってエリアーデとワッハのこれまで知られていなかった他の研究者や思想家との影響関係を明らかにし，さらには彼らの理論面での研究の可能性を示すことによって，エリアーデとワッハの研究の可能性を広げるという役割を果たしているということである。これらの成果に基づき，彼らの方法論上の研究，とりわけ現象学，解釈学的側面の研究をさらに綿密に行うことが，今後の課題となっていくであろう。